

## 24. 嵌り腸管の穿孔をきたした Hernia into the umbilical cord の1 治験例

○大塚康吉, 西原正純, 林 尚彦, 野口 敦  
古谷四郎(徳島県立中央病院外科)

患者は生下時体重3320g, 在胎期間36週3日の早産児で, 生後8時間目に臍帯より胎便排出を認め紹介された。ヘルニア門は3×3cm脱出臓器はメッケル憩室。小腸は嵌り部で通過障害をきたし, その口側は著しく拡張し, 肛側は細く, 回腸閉鎖を疑わせる像を呈していたが内腔の閉塞はなかった。メッケル憩室を切除し, 腹壁は一期的に閉鎖した。術後の経過は良好で, 順調に発育している。

## 25. 尿管管開存を伴う臍帯ヘルニアの1 例

○上田祐造(国立福山病院外科)

5~6000人に1~2例といわれる臍帯ヘルニアと, 5~7000人に1例といわれる尿管管開存との合併例は極めて稀である。私達は, 当初臍帯ヘルニアに膀胱脱出を合併したものではないかと考えたが, 尿管管開存合併であった生後2時間の女児(3050g)を手術的に治癒せしめたので報告する。主訴は臍部膨隆と大きな粘膜様腫瘍脱出で, 生後3時間目に全麻下手術施行。本症例は私達が調べた限りでは, 本邦第6例目である。

## 26. 妊娠家兎の胎仔を用いた gastroschisis に関する実験的研究

○大塩猛人, 藤野良三, 大田憲一, 小笠原邦夫  
古味信彦(徳島大学第1外科)

妊娠23日目の家兎12羽の127羽の胎仔のうち22羽に子宮内手術を行ない, 手術後7日目の満期に自然分娩を行なわせて, 肝臓, 胃および腸管の脱出した実験的 gastroschisis 新生仔5羽を得た。これらの腹腔, 胃, 腸および肝臓容積を測定し, 対照例と比較したところ, gastroschisis では胃, 腸および肝臓容積は対照例と有意の差を認めないが, 腹腔容積が著明に小さく, 本症の治療に際しては腹腔を拡大する Schuster 法およびその変法が良い。

## 27. Duhamel 手術後盲嚢形成のみられた症例に対する池田式腸圧吻合鉗子使用の経験

○吉田恭弘, 遠藤昭徳(鳥取大学第1外科)

症例は11歳の男児。Hirschsprung 氏病にて, 2歳時S状結腸に人工肛門造設。4歳時, Duhamel 原法施行。術後便失禁がつづき, 2回にわたりコッヘル鉗子による

隔壁圧除除去を行ったが, 十分な隔壁除去に至らず, 直腸盲嚢形成の為と思われる便失禁が続いた。Duhamel 術後約8年後に池田式腸圧性吻合鉗子を用いて中隔の除去をはかり, 10日目に脱落。以後便失禁が緩解した。

## 28. 複雑なる合併奇形を有する鎖肛1 例

○万代矩之(南陽病院外科)  
九富勝美(同 小児科)

現在の小児外科領域では, 鎖肛, 腸回転異常は, それほど予後の悪くない疾患とされているが, 我々は最近, 鎖肛に腸回転異常, 重複腸管, 尿道下裂合併例を経験した。不幸にして, この症例は失なしたが, その治療に際しこれらの疾患は単に, 器質的な, 形態的な, 異常のみにとどまらず, 機能的な異常をも, 合併している様, 痛感したので, ここに報告した。

## 29. Ano-vestibular fistula をもつ女児Ⅲ型(低)鎖肛に対する cut-back operation の経験

石井哲也, 横山 隆, 尼川紘史(広島大学第1外科)

教室において経験した先天性鎖肛症例47例の根治術式の基本方針について述べ, 特に女児鎖肛症例の中で, 新国際分類 Intermediate type に属する, Rectovestibular fistula をもつものでは, anal transplant procedure by potts を行わねばならないが, Low type の Anovestibular fistula をもつもの, あるいは covered anus in complete では単純な cut-back operation によって良好な術後排便機能, 及び外観を得ることが出来ることを強調し, その鑑別方法を述べた。

## 30. 鎖肛症例の検討

○斎藤 永, 濃川正信, 林 征雄, 八牧力雄  
(山口大学第1外科)

平岡興三, 鈴木英太郎(同 小児科)

当教室において, 26例の鎖肛を経験した。国際分類によれば, translevator 型15例, intermediate 型3例, supralelevator 型6例, miscellaneous 型2例であった。死亡例は, 全て重篤な合併症を有していた。病型別に, supralelevator 型に術後排便機能障害が多かった。Kelly code の clinical score とレ線学的直腸会陰曲形成状態及び ano-rectal manometry との関連性があり, 予後を知る上に有効であった。以上, 若干の文献的考察を加えて報告した。

特別講演: 新生児外科

九州大学第2外科助教授 池田恵一